町の応接間を目指して

-学芸員：沼田絵美さんの取り組み-

「美術館」それはあなたにとってどんな存在でしょうか？
今回は、倶知安町の「小川原脩記念美術館」で学芸員として働く沼田絵美さん(43)が取り組む魅力的な美術館づくりから、美術館の役割について考えてみましょう。

（有塚桃菜/北海道大学教育学院　修士課程２年）

景観に溶け込む　美術館

皆さんは「小川原脩記念美術館」を知っていますか？

小川原脩記念美術館は、倶知安町出身の画家・小川原脩（1911～2002）の初期から晩年にいたるまでの油彩画約700点を所蔵・展示する美術館です。また、地域の作家を紹介する美術館でもあります。そんな小川原脩記念美術館の特色は、**「景観に溶け込む美術館」**です。ロビーの大きなガラス窓からは、雄大な羊蹄山を見渡すことができます。平屋建てのシンプルなつくりで、ゆったりした時間が流れる素敵な場所になっています。

沼田さんってどんな人？

そんな小川原脩記念美術館で2012年から学芸員として働くのは、**沼田絵美さん**。沼田さんは札幌市出身で、結婚を機に倶知安町へ移住してきました。移住から数年後、オファーがあり、沼田さんは美術の世界へ飛び込むことになります。沼田さんは当時の心境を**「自分にできるか不安はあったが、嬉しかった」**と語ります。

なぜ不安を抱えていたのか。それは沼田さんの学問的背景に理由がありました。沼田さんの専門は、美術ではなく気候などを研究する地理学だったのです。ただ、子どもの頃から博物館や美術館が好きだったという沼田さん。大学院生時代には、札幌市博物館センターで解説員として働いていました。倶知安町に移住する際も、すぐには仕事で関われなくても、美術館と博物館と繋がっていられることに安心したそうです。**「(私を)見つけてくれて嬉しかった」**という言葉からも、自分の好きな場所と関わりを持ちたいという気持ちをずっと抱き続けていたことが分かります。

当時は、専門ではない美術の世界に少し不安を抱いていた沼田さん。しかし、芸術の面白さについて**「絵でも彫刻でも見てもらう時は、作った人の手を離れ、見る人のものになっている。その作品をみて人それぞれ違う考えや印象を受けるのが面白い。人の手がつくりだしているのに不思議だなと思う。」**と語る様子を見ていると、すっかり美術の世界の楽しさに引き込まれているのだなと感じました。

そして沼田さんは、学芸員として小川原脩作品の魅力を伝えるだけでなく、美術館を魅力的な美術館にしようと尽力しています。例えば、コンサートを開いて、美術館を音楽と触れあう場所にしてみたり、工作などのワークショップを開催して、自分で作る体験の機会を作ってみたり。それは、沼田さんが魅力的な美術館を**「どんな人がいつ来て**

も楽しくゆっくり過ごせる場所」と考えていることが大きく影響しているようです。

【小川原脩（1911～2002）】

倶知安町（旧倶知安村）生まれ。東京美術学校（現東京藝術大学）卒業後、前衛画家としての道を歩みはじめるが、戦時体制の強化に伴い表現活動への規制が厳しくなり断念。戦後、郷里倶知安に戻り以後６０数年間この土地を離れることなく創作活動に専念。６０歳を超えてから訪れた中国、チベット、インドで創作への新しい境地を開く。

(https://www.town.kutchan.hokkaido.jp/culture-sports/ogawara-museum/)

コラム「沼田さんと小川原脩」

美術館で働くようになってから「小川原脩」という画家を知った沼田さん。
今では、「小川原脩」の魅力にどっぷりハマっているようです。
ここでは、沼田さんから見た小川原脩について少し掘り下げてみましょう。

Q. 小川原脩の魅力とは？

A.「描く絵が上品、品あるという作品そのものの魅力がまず一つ。そして辿ってきた人生が朝ドラになりそうなくらいドラマティックな生涯なところ。いろいろ作品は残っていますが、まだ彼の辿ってきた人生で解き明かされていないことも多く、そこを追い求めていく楽しさがある作家です。」

沼田さんが語る熱量からも、小川原脩への愛情が伝わってきます。
では、沼田さんは、小川原脩のどんな作品が好きなのでしょうか？

Q. 沼田さんのお気に入りは何年代ですか？

A.「1959～1962 あたりのアンフォルメル（激しい抽象）、赤と黒だけの抽象画です。絵の具の厚みもありパワフル。何を書いてるか一見わからないけれど、命のうごめきみたいなものを感じます。熱くだぎっているものを感じて好き。」

沼田さんお気に入りの年代の作品は、美術館で 30 点以上所蔵しているそう。
タイミングが合えば1，2点は展示されているようです。ぜひ、沼田さんに解説してもらいたいですね！
年代によって様々な顔を見せる小川原脩作品。
あなたの心に刺さる作品もきっと見つかるでしょう！

鑑賞授業で繋がる学校と美術館

他にも沼田さんが力をいれて取り組んでいることに**鑑賞授業**があります。これは、中学一年生を対象とした、美術館で対話型の鑑賞を行うという授業です。中学生は、人に見たものを伝える力ができてきているのもあり、ストーリーにしようとする傾向があるそうです。**「一人で考えていると、そのストーリーが暴走することもありますが、何人かで一緒に考え、他の人の見方が入ってくることで、絵の中に根拠を持てるようになり、だんだん解釈が良い形になっていきます。」**と沼田さんが語るように、この鑑賞授業では、他者と共に考えることを大切にしています。この授業を通して、生徒たちは、自分の考えも相手の考えも尊重する力を身につけているのです。

現在、この授業は、中学校との間で定着しているようで、たとえ担当の先生が変わっても継続しています。しかし沼田さんは、**「本当は小学五年生で全員に一回は美術館での体験をしてほしい。中学生くらいになっても活発な言語活動はできるけど、小学校高学年のタイミングで一度、みんなと視点を共有するという体験をしてみてほしい。」**と語ります。今後、鑑賞授業がより幅広い年齢を対象に行われ、授業を通して**「自分を認めてもらえる、他人を認める」**ことを経験する生徒が増えていってほしいと思います。

地域のなかの美術館

倶知安町の教育の場としても大きな役割を果たしている小川原脩記念美術館。しかし、美術館の存在は、倶知安町に住む子どもだけではなく、大人にとっても重要な意味をもちます。沼田さんは、地域にとってどんな存在になりたいかという質問に対し、次のように答えてくれました。**「美術館は、美術に対して親しみをもつ子どもを育てることができるという点で大事ですが、大人にとっても受け止め方が寛容になるといった効能のある場所として認識されていったらいいなと思います。最近では、芸術との関わり合いができる場にはなってきてると思いますが、美術館のある町として、人を受け止められるような効能をより広めていけたらなと。」**沼田さんは、年齢関係なく美術館での経験を通して、**「多様性への寛容さ」**を育みたいと考えているのです。

さて、実際にそのような経験をしてもらうには、人々が美術館を訪れることが重要になってきます。そのためにも、**「気軽に来られる」**を大切にしたいと沼田さんは言います。**「例えば友達と、自分の家ではなく美術館で会おうというように。応接間みたいな感じですね。建った頃と比べると、そのようなイメージが少し薄らいできているので、改めてそういう気持ちで接してもらえたらなと思います。」**

とりあえず美術館に行ってみようか。そんなイメージを持ってもらうことを目指し、色々な仕掛けを作っていきたいと意欲を見せる沼田さん。

気軽に立ち寄れる美術館を目指して、沼田さんの挑戦はこれからも続きます。

【編集後記】

私は、今回の取材で初めて小川原脩を知りました。小川原の絵は、時代背景などの影響を大きく受けているようで、各時代でかなり印象が変わるそうです。その違いを実際に見てみたかったのですが、コロナ禍ということで現地を訪ねることは叶いませんでした。いつか状況が落ち着いたら、実際に訪れて小川原脩記念美術館を堪能したいと思います。最後に、取材に協力してくださった沼田さん。本当にありがとうございました。